研究余滴

国際歴史学会議のことども

杉　原　四　郎*

今年の８月25日から８日間，西独のシュツットガルトで第16回の国際歴史学会議が開かれた。参会した世界の歴史家は，56ケ国から２千人をこえ，日本からも数十人が出席した。私は５年まえの1980年８月にルーマニアのブカレストで開かれた第15回の会議にはじめて出席した（杉原「ブカレストのマロニエ」，『読書灯籠』，未来社，1982年所収参照）が，それにつづいて今回も参加した。会期中一日はテュービンゲン――シュツットガルトから電車で約１時間でゆける――を訪ねたが，其他は毎日どこかの会場で，本部でもらった報告集（２冊，850ページ）をたよりに報告をきく――ブカレストの時には英・独・仏の三ケ国語の同時通訳がイアフォーンできけたが，今度はそれがないのが不便だった――かたわら，大学の図書館やヴュルテンブルグ――シュツットガルトはその首都である――の州立図書館で時をすごした。

私は1958年の春約１ケ月かけて東西ドイツの諸大学を見てまわったが，シュツットガルトははじめての訪問であった。この都市で先ず連想するのは，ディーツ（J. H. W. Dietz, 1843—1922）が1881年にここで出版社を創設し，そこからマルクス主義の著作や雑誌――最も有名なのは1883年に創刊された『ノイエ・ツァイト』(Die Neue Zeit）である――を続々と公刊したことである。ディーツ社は創設者の死後ベルリンにうつり，現在は東ベルリンとハノーファーに分裂しているので，シュツットガルトとは関係ない（水田洋「ディーツ出版社」，『知の商人』，筑摩書房，1985年所収参照）が，この都市が学術書出版の一中心であることはかわりないようで，国際歴史学会議の主な会場だったリーダーハレのラウンジには，東西ドイツの多くの出版社が歴史書を陳列して即売会を開いていたが，その中にはシュツットガルトのコッタ（Cotta）やクレーナー（Kröner）など，わが国でも名を知られている出版社もあった。

だが現在のシュツットガルトで最も重要な産業は，何といっても自動車，それもベンツ（Benz）の工場の存在であろう。シュツットガルトの鉄道中央停車場の尖塔にはベンツのトレードマークが高々と掲げられており，これがこの都市のシンボルでもあることをしめしている。国際歴史学会議の会期中に種々のエクスカーションが催されたが，私は郊外にあるベンツの工場見学に参加した。４万人以上の労働者――その

＊　すぎはら　しろう　　元甲南大学学長

中にはトルコ人をはじめかなり多くの外国人労働者（Gastarbeiter）が含まれているとのこと——が働いている工場で，車体が流れ作業で組み立てられてゆく過程は壮観であった。『ノイエ・ツァイト』の創刊より3年おくれて1886年に世界で最初の自動車工場がこの地にできてからの自動車工業の歩みについては，やはりここの郊外にあるベンツの自動車博物館をぜひ見学するようにすすめられた。

国際歴史学会議は，1900年にヨーロッパの歴史家がパリで会議を開いたのがはじまりで，第二次大戦後は1950年にやはりパリで第9回大会があった。日本はそのつぎの第10回大会（1955年，ローマ）から参加したが，その後5年ごとに開かれる大会に出席するわが国の歴史家の数は漸増し，今度の大会では報告者とコメンテーターとだけで約10人に達する（西川正雄「第16回国際歴史学会議について」，『歴史学研究』543, 1985年7月参照)。日本以外のアジアや第3世界の国々からの参加も徐々にふえつつあるが，この会議が現在でも欧米中心であることはいなめない。なればこそ8月25日の開会式で，ケニヤやナイジェリヤや中国からの出席者がいることが知らされた時，会場から自然に大きな拍手がわき起ったのであろう。

その開会式でなされた大統領ヴァイツゼッカーの挨拶は格調の高いものであった。彼が今年の5月8日第二次大戦終結40年を記念して行った演説（その全訳は『世界』11月号に所載）は多くの人々の心をうったが，彼は世界の歴史家の会議がこの記念すべき年に，戦後ドイツではじめて開かれたことの意義をかみしめるような口調で，まず外国から多くの歴史家をこの国に迎え得たことのよろこび——その際とくに彼はこの会議の議長であるギェイシュトルがポーランドから来たことに言及した——を語り，ついで「歴史学の普遍的課題（Ökumenische Aufgabe）は互敬と公開と批判的論争の雰囲気の中で協力を促進することにある」といい，「歴史家の大きな課題は忘却と虚偽の形式とに対する戦いによって政治家いな人類一般が客観性（Objektivität）を獲得することを助けることであるとのべ，「われわれにとっても隣人にとっても清澄かつ平静な国民的自己意識（geklärtes, ruhiges nationales Selbstbewußtsein）をもつことが非常に大切である」と語った。大統領の言葉をうけてドイツ歴史家同盟会長のマイアー教授は，ナチス時代におかしたドイツ人の罪を想起しつつ，「われわれは歴史とともに大きな諸困難をもちかかえているが，歴史学はそれに立ち向ってゆかなければならない」とのべた。

開会式のフィナーレはシュツットガルト管弦楽団の見事な演奏であった。第一日目の夜都心のノイエ・シュロスで州首相の招宴があり，そこで私たちは5年前ブカレストで知り会った友人と再会，ワインのグラスを重ねた。

リーダーハレと大学の教室で会期中30以上の報告会が開かれたが，それらを分類すると，大テーマ，方法論，時代別部会の三つにわかれ，最後のものはさらに古代，中

世，近代，現代に細分される。さらにそれ以外に自由論題の円卓会議がいくつかあった。大テーマは1，「インド洋」，2，「他人のイメージ」，3，「ファシズムへの抵抗」の三つである。「インド洋」の部会は国際歴史学会議で高橋幸八郎氏の逝去のあとアジア諸国からの唯一人の理事であるインドのチャンドラ氏が司会した。インドと諸外国との経済関係についての報告が多く，日本からは近藤治氏が「ムガール帝国時代の日本と印度洋」を報告された。

「他人のイメージ」は異邦人，小数派および周辺的人間の問題をあつかうもので，その報告集は上記の2冊の報告集とは別に，"L'image de l'autre (Étrangers・Minoritaires・Marginaux)" と題する冊子にのっている。この部会では永原慶二氏が「東アジア古代・中世におけるケガレ観念と身分差別」について報告された。

「ファシズムに対する抵抗」ではヨーロッパでの抵抗史の他この会議にはじめて参加した中国の二人の歴史家による中国での日本に対する抵抗運動についての，また神田文人氏の日本における1931年—1945年の反ファシズム運動の報告があった。

方法論では1，「考古学と歴史学」，2，「映画と歴史」，3，「マックス・ウェーバーと歴史学方法論」という三つの問題がとりあげられたが，最も多くの人々の関心をひいたのは3番目の部会であった。ビィーレフェルト大学のコッカが主宰するこの部会は三つの分科会にわかれ，第一にウェーバーの史学方法論そのものが，イタリーのロッシ，西ドイツのモムゼン——彼はいま刊行中のウェーバー全集の編者の一人である——，イギリスのマルクス主義歴史家ホブズボーム，アメリカのベンディクス，フランスのカルホネル，ポーランドのトポルスキによって論じられた。第2部会ではウェーバーの古代社会論が（ここで弓削達氏がコメンテーターとなった），第3部会ではウェーバーの中国・印度論が（ここで斯波義信氏が報告した）とりあげられた。第4部会ではウェーバーとマルクスとが対比され，ソ連・東独の学者と西ドイツのヴェーラーが論戦を交えた。こうした多彩な報告と対論は一本にまとめられて来年ゲッティンゲンのヴァンデンヘック社——それはコッカやヴェーラーらが編集している雑誌（"Geschichte und Gesellschaft"）の出版元でもある——から公刊される予定なので，ここでは個々の報告の紹介は省略し，コッカによる全体的総括をしるすにとどめよう。

コッカは2日間の討論を通じて意見の一致をみた点として，(1)歴史学にとって何らかのモデル設定ないしそれを基礎づける理論が必要であること，(2)ウェーバーの業績について高い評価——その意味は論者によってちがうけれど——があたえられ，彼の思想はさまざまの意見を交流させる媒体として活用されうること，(3)歴史家の規範的立場とその分析方法との間には内的関連が存在すること，という三つを列挙した。そして意見がわかれた点として，(1)マルクスとウェーバーとの異同をどう考えるか，(2)

ウェーバーの近代化論のメリットとデメリット，とくにそのヨーロッパ中心主義についての二つを指摘した。コッカが一致点の第1にあげた歴史学における理論の重要性については，最近の社会史が民衆の日常生活の記述を以てただちに歴史とする傾向に対する彼の批判が含意されているのだが，会議の模様を報じた『フランクフルター・ルントシャウ』（1985，9，6）の記事には，この理論偏向は外国からの参加者にとってはまさに典型的にドイツ的（typisch deutsch）であったと書かれていた。

シュツットガルトの都心にシラー広場があり，そこに等身大のシラー像が立っている。シラーはこの都市の近くに生れ，この州の領主の庇護をうけた。国際歴史学会議のエクスカーションの一つに，近郊のシラー博物館へ行って彼の手稿を見学する計画もあった。またこの広場とほど遠くない所にはヘーゲルの生れた家の跡があり，今建っている家の壁に「1770年ヘーゲルここに生れる」という掲示があった。彼の誕生日は8月27日なのだが，ちょうどその日に私は彼が青年時代そこで学んだテュービンゲン大学を訪問したのである。

シュツットガルトの大学が工業専門学校を土台として作られた新しい大学であるのに対し，テュービンゲン大学は1477年に創立された伝統ある大学で，図書館が所蔵する220万冊も人文・社会科学の分野が充実している。私が関心をもつ J. S. ミルやマルクスに関する文献もシュツットガルト大学の図書館とはくらべものにならないほど豊富だ。私は1950年代から60年代にかけてフェッチャーを中心とするテュービンゲンの研究者集団が機関誌『マルクス主義研究』に拠ってユニークなマルクス・エンゲルス思想研究を展開したこと（杉原「エンゲルス研究の動向」，『マルクス・エンゲルス文献抄』，未来社，1972年所収参照）を想起した。

この静かな大学町で私は西ドイツが当面する二つのきびしい問題に気づかせられた。一つはシュヴァルツヴァルトとよばれる西南ドイツの美しい森林が公害のためにむしばまれつつあるという事態である。テュービンゲンの鉄道の駅の一角に「緑の党」（Grüne）の宣伝場があり，そこにドイツの森が危険にさらされていることを訴えた写真やパネルやパンフレットがおかれていた。テュービンゲンは「緑の党」の運動の主要な拠点の一つだそうである。それからネッカー河にかかる橋の上にも，城跡にのぼってゆく石階にも，白いペンキで大きく HIROSHIMA, NAGASAKI と書かれているのが目についた。これらはおそらく5月8日の終戦記念日や8月6日の原爆投下日にちなんで書かれたものであろうが，この地での反核運動の高揚をうかがわせる。私はこの文字を見ながら，国際歴史学会議の開会式でのマイアー教授の，「われわれは歴史とともに大きな諸困難をもちかかえているが，歴史学はそれに立ち向ってゆかなければならない」という言葉を思い出していた。

5年後の1990年，国際歴史学会議はマドリードで開催される。